「厳しい道を選ぶ」―大村智博士―

平成二十七年十月五日、うれしいニュースに日本中が歓喜にわいた。この年のノーベル生理学・医学賞が、大村智博士ら三氏に授与されることが発表されたのだ。

大村博士は、昭和五十四年、寄生虫を退治する物質を作り出す菌を発見した。例えば、主に熱帯地域で発生するオンコセルカ症（河川盲目症）は、ブユに刺されることによって感染した寄生虫が人の体の中で膨大な数の幼虫を産み、その幼虫が眼球に入ると、ときには目が見えなくなってしまうという怖い病気だ。

大村博士の発見を基にして開発された薬（メクチザン）は、この病気を防ぐことができた。さらに、他の病気についても効果があることが明らかとなった。この薬は、これまでになんと十数億人の治療と感染防止に使用され、人々を病気の苦しみから救ったのである。

発見はこれだけではない。抗がん剤開発の元となるものなど、数多くの天然物質を発見してきた。

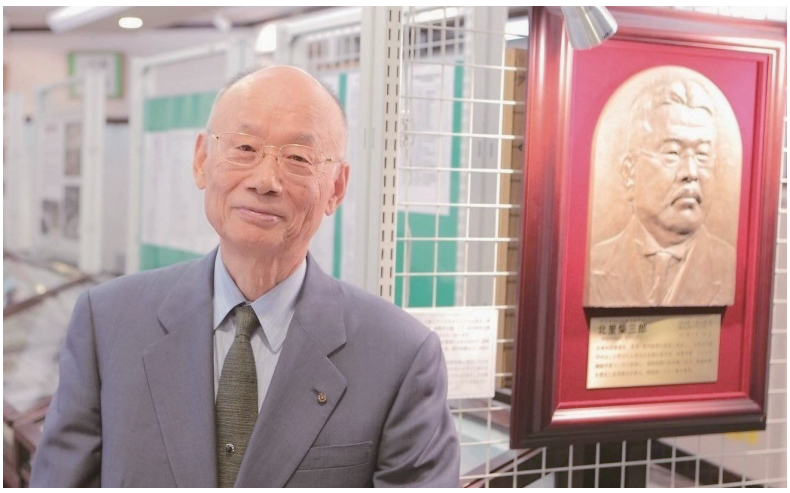
今回のノーベル賞授与は、人類の健康と福祉の向上、そして科学の発展への、大村博士の多大な貢献に対するものである。

授与決定が発表された日の夜、北里大学で記者会見が開かれ、大村博士は受賞の喜びを語った。その様子は、まさに、実直な人柄が表れたものだった。

◆

「私の仕事は微生物の力を借りているだけのもので、私自身が難しいことをやったわ

メクチザン　米国の製薬会社メルク社（日本ではMSD）が開発した薬の名前



けじゃなくて、全て微生物がやっている仕事を勉強させていただいたりしながら、今日まで来ているというふうに思います。そういう意味で、本当に私がこのような賞をいただいていいのかなというのは感じます。……」

「祖母がいつも繰り返し言ったのは、とにかく智、人のためになることを考えなさい。これだけを繰り返し聞かされました。そういったことで、なんとなく人のためになるってことが大事だなっていうことを小さいころから、たたきこまれました。研究者になりましてもね、もちろん自分のやりたいことをぱっと、どちらが世の中のためになるかなとか、人のためになるかなって、そういう基準の、なんて言うかな、分かれ道に来たときはそういうことを指標にしていたというのは思います。……」

「(大学を)卒業して、都立高校の先生をやりましたけども、その都立高校の夜間部っていいましたが、夜間の生徒たちは、もう工場で仕事して、それで駆けつけてきて勉強しているわけですよ。それを見まして、私なんてまったく遊んでいて、ようやく大学卒業したような状態なのを、これではいけないと、自分も勉強し直そうっていうことで、本格的な勉強をやったっていうことですね。……」

◆

大村智博士は、かつて、都立工業高校の定時制課程の、物理と化学の教員だった。免許をもっていたために体育も指導し、卓球部の顧問もしていた。

それは、定時制課程の生徒たちが問題に真剣に取り組ん

でいる教室を、大村先生が巡回していた時のことだ。先生が、ふと目にしたのは、ある生徒の鉛筆を握る手の指だった。その指には油がこびりついていた。改めて、他の生徒たちを見回してみると、服のところどころに油をにじませている生徒もいる。昼間、汗水を流して一生懸命に働いて、夜は高校で勉学に向き合う生徒たち。大村先生は、そんなひたむきな生徒たちの姿に心を打たれ、「自分も勉強し直そう」と固く誓ったのであった。

大村智先生は、昭和四十年から研究所に勤めるようになった。自ら立てた誓いを胸に、一心に研究に没頭し、昭和四十三年には薬学博士、昭和四十五年には理学博士の学位を取得した。

こうして、さらに研究者としての人生を全うしていこうとしていた大村博士にとって、その後の研究の方向性を決定づけるできごとがあった。

それは、隣の研究室で、新しい物質を発見しようと奮闘している研究者たちとの出会いだった。一年間、骨身を削って働き、探しぬいても何も出てこないことはあたりまえ。やっと見つけたと思っても、すでに誰かが発見した後のこともある。その奮闘をまのあたりにしたことは、まさに衝撃だった。

その頃、大村博士の研究は、多くの研究者から注目を浴びていた。ただそれは、他の研究者が苦労してやっと見つけた物質について、その構造を明らかにするというものであった。これでは、他人の成果の上に立って、何かをやろうとしているだけではないかと、大村博士は猛省し、今後は、自分も泥まみれになる覚悟で、新しい物質を見つける研究をしようと決意したのである。

◆

土壌一グラムの中には、約一億個の微生物がいると言われている。大村博士は、全

国各地の土を採取しては、その中の膨大な数の微生物を調べることを繰り返した。そして、ついに、静岡県伊東市の土からある菌を見つけ、さらに、その菌が寄生虫を退治する物質を作り出すことを発見したのである。

ここに一枚の写真がある。大村博士がガーナ共和国で、ある集落の学校を訪れた時のものだ。

子供たちは大歓声を上げ、博士の周りに駆け寄ってきた。博士を取り囲み、博士と一緒にVサインを掲げる、はち切れんばかりの笑顔の子供たち。彼らは皆、オンコセルカ症（河川盲目症）の苦しみから救われた子供たちだった。

大村博士の挑戦は今も続いている。いつでもどこでも、土を採ったら研究室に送れるように、博士の財布の中には、小さなビニール袋が必ず入っている。

記者会見の席で大村智博士はこう語った。

「楽な道、楽な道へ行くと結局は、本当のいい人生にならないと私は思います。だから厳しい、こちらの道に行ったほうが厳しいかもしれないっていう、そういう道を選ぶべきじゃないかと私は、自分じゃそう考えています。」

【参考資料】「大村智 ―2億人を病魔から守った化学者―」馬場錬成著 中央公論新社